学政学の名称から

『研究会誌』創刊10周年記念の挨拶にかえて

一般に学問というものは、その内容をとって名付けられるもののようであるから、その名称を聞いただけでどんなことを研究する学問であるのか見当がつく。法学といえば法律を、経済学といえば経済現象を、また生物学といえば動植物の生命現象をとり扱う学問であろうと想像できる。では、家政学とはどんな学問であろうか。私はその名称から思をいたし、その根幹をなすと思われる家庭道徳にふれることで挨拶としたい。

さて、家政という語に近似するものとして国政の語があるが、国政とは勿論国のまつりごとのことである。ここから推せば、家政とは家のまつりごとと解釈してもよいのではなかろうか。家のまつりごと、つまりそれは家庭をおさめることであるが、その根幹に、私は、親子の情愛に裏うちされた家庭道徳がなければならないと思うのである。しかして、個人の幸福も国家社会の和平も、一にここに根ざしてはじめて生まれるものと考える。

かってわが国は、戦争という行為によって家庭をおさめる道徳を疎かにしたが、その結果はどうであったか。敗戦という憂き目を見たのである。敗戦は、武力・財力といった物の優劣によって決まったのではなく、根源的には家庭道徳を蔑ろにしたからであろう。そして現今は、個人の幸福を希求するのあまり、自己を主張し家庭道徳を疎かにしているのであるが、その結果はどうか。さまよえる孤独な生活の中で、人間性を喪失しているのである。

このように考えてくると、個人の幸福も国家社会の和平も、家庭生活と深い係り合いがあり、改めて家庭道徳

の重要性が思われるのである。そして、その家庭道徳の根幹をなすものとして、私は孝を考える。孝とは何か。申すまでもなく、広大無辺の親心に応える子心であり、純粋にして無私なるまごころなのである。そのまごころを極限まで押し及ぼすとき、孝心は、父母への情愛という特殊性を超えて普遍性をもつ人類愛に高められていくのである。この人類愛にまで高められた普遍的情愛としての孝心を家庭道徳の根幹におくとき、はじめて家庭道徳は、個人の幸福や国家社会の和平の源泉となり原理となり得ると考えるのである。

かくて私は、家政学をば、その名称から推して、家庭をおさめることを研究する学問、と見做した上で、家庭をおさめるおさめ方は、道徳を根幹にした立場からでなければならない、ということを述べてきたのである。しかし、拙論は、家政学の何たるかを知らない独善の論であり、ご叱正を仰がなければなるまいと思う。いま、『研究会誌』創刊10周年記念に当るに及んで、この文をもって挨拶としたい。

家政学研究会誌第10号（昭・58・3・1）

昭和56年同窓会（短大食堂）